

- ① ピアノを奏でる。
- ② 強いきずなで結ばれたシテイ関係
- ③ 海にノゾんだ公園がある。
- ④ 米をチョゾウしておく。
- ⑤ 彼は本郷氏を実行委員長に才した。

まず彼は医療を受け、食べるにしても普通の方法では食べられなかった。それは人工的な延命ではないのかと自問し、たしかに自分は人工的な手段を使って暮らしていると認め、そしてそうして生きることが肯定している。また身体がまったく動かなくなっても、意志を伝えられる限り、いや伝えられなくなっても、生き続けたいとはつきり記している。そうして自分の言うこ

とが矛盾していることにも気がついている。また、著書四冊のうち一冊は小説のかたちをとっているのだが、その中の主人公は、呼吸困難で意識を失った緊急事態への家族の対応として呼吸器を付け、そして意識を回復した後、自らがそれを肯定することになる。すこし何かが違えば、彼はもつと生きたらうとどうしても思える。しかし当初の決定は覆されなかった。²

一つに、呼吸困難やそれに伴う苦しさにつきまとわれ、そして疲れていった。そして様々なことが次第に自分の思い通りにならなくなっていく。むろんだから援助を人に頼む。しかし彼は病院を自らが死ぬまでの一時期の場所として選んだという思いもあり、生きるために必要なことをなんでも要求するのはためらわれた。結果的に遺書になった文章が残されているのだが、そこには呼吸器の装着を断ることを繰り返した後、「私の考えは間違っているかもしれませんが。……しかしこれ以上呼吸器を装着して、ご迷惑をかける訳にはいきません。」とある。彼は前向きな人で努力家であり、またそういう時代と社会に生きた。それは他の患者のための活動に向かわせたものでもある。しかし自分のことになると、人に「迷惑」をかけまいとし、自らの否定に向かつてしまった。³

それでも彼は自らのためらいを文字に残したからそれを知ることができる。しかしそうでなければ、せいぜいすっきりした潔い「決定」と、その決定通りに事態が運び終わったことだけが残される。それで周囲はそれでよしとする。そんなことがおびただしく私たちのまわりに起こっている。

迷惑をかけないことは立派なことではあるだろう。だがこの教えは反対の事態を必然的に招く。それを他の人に要求するなら、周囲に負担をかけるようなことをお前はするということになる。その分周囲は、他者に配慮するはずだったのに、負担を逃れられ楽になってしまう。自らの価値だったはずのものを自らが裏切ってしまう。⁴

犠牲という行ないにも同じことが言える。誰かのために犠牲になることは立派なことだ。だが、その人に犠牲になることを教えるのは、その人の存在を否定することになり、その価値自体を裏切る。そして犠牲になることを教える側はそのまま居残るのだから、ずいぶん都合のよいことだ。

だから、正しさ、美しさの語られ方には注意深くならざるをえない。実際に何が何より大切にされているのか。

とくに「尊厳な死」と呼ばれるものにおいて遣り取りされるのは明らかに不等価なものだ。尊厳を保つためにと言われ、ただ生きているよりもという言い方で説明されるその行ないは、なにか精神的に高い営みのように思うかもしれないが、それは違う。一つに耐えがたい苦痛が言われる。もちろん身体が痛いのは辛い。しかし苦痛は、医療者が下手でなければ、かなり軽減できるようにになっている。すると、言葉の飾りをとって残るのは、身体的にあるいは知的に、自らが何かができなくなるから、できる度合いが減るから、生きるのをやめさせよう、あるいは自らやめようという、それだけだ。^b

できるとは、生きていく上で役に立つことができることだ。つまりできることは生きていくための道具だ。できることが少なくなったら生きることを否定するというのは、存在の道具によって存在が規定され否定されているということだ。⁵これは逆立ちしたおかしなことである。ところがそんなことが、その人の周りの人たちによって仕立てられ現実のものにされているし、またその人自らの決定としてもなされてしまうのである。

一つには、実際に支えがないために生き難いから生きられない、あるいは生きないことにするということである。一つに、生存のために役に立つもの、つまり手段を自力で生み出せないとき、生み出せない自分が生きる価値を否定する。この二つとも、存在のための道具によって存在が支配されている。

世界にどうしてもその道具が足りないのなら、そのために生きていけなくても仕方がないかもしれない。しかし私たちの世界はそんな世界ではない。少子化・高齢化で人が足りなくなるといってお話があるが、よく考えれば、そう深刻になる必要がないことははっきりしている。一人ひとりの存在を認め、そのための道具を各人について用意する。そのために世界にあるものをうまく分ける。このような順序で考えればよい。

尊厳の問題とはまず単純にそんな問題ではないか。そしてできることであるにもかかわらず、それがなされることが、尊厳が冒されているという事態の核にあると思う。^{注2}

例えば、私たちが新型コロナウイルスで騒いでいる間に、世界中で一日に約八〇〇〇人の人がエイズで亡くなっている。とくに南部アフリカに多い。それは不可避の悲劇ではない。安く提供しようと思えば供給できる薬を使えば死なずにすむのに、供給されないか

ら亡くなっている。それが悲劇なのだ。

それに比べればこの国で生じていることはもう少し見えにくいかもしれない。つまり本人の選択として、すこし屈折した形で現われる。ただ、交通事故死よりはるかに多数の自死の背景には、失業や倒産、仕事絡みの疲労がある。あえて言えば、そんな背景しかないのに、そうなってしまうている。実際に人が生きていくことのできる物も、何もかもこの社会に既にある。その意味で、どこにも危機がなく悲惨があるはずがないにもかかわらず、こうなってしまうていることが悲惨なのだ。

どんな生き方がよいか知らない。ただの生がたんに肯定されればよい。それを消耗させようとしたくないことだ。そのために、当たり前のことを当たり前のこととして確認していくこと、本来は可能なことを可能だと言いうことができる。そして、その方に現実をもっていくことも、本来は可能なことから、できる。

(立岩真也『希望について』)

注1 ホスピス……末期癌など治癒の困難な病気にかかった患者とその家族に対して、快適な生活を送れるように支援およびケアを提供する場。

注2 新型肺炎……二〇〇二年～二〇〇三年に流行した新種の感染症。世界中で八〇〇〇人程が感染し、七七〇人程の死者を出した。

注3 自死………自殺のこと。

問一 線a～cの述語部分に対応する主語を、その部分を含む一文から抜き出して答えなさい。なお、主語が明示されていない場合は、解答欄に×を記入しなさい。

問二 次の文は問題文中から抜き出したものです。この文を問題文に戻したとき、直後に来る部分を四字で抜き出して答えなさい。

ただ、彼の書いたものを読んでいくとまったく単純ではない。

問三 線1「こういう死に方はなっている」とありますが、これとほぼ同じ意味の内容を含む連続する二文を、問題文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問四 線2「当初の決定」とありますが、この決定とはどのようなことを決めたのでしょうか。その具体的な内容を述べた部分を、問題文中から二十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 線3「ためらい」とありますが、これは何に対するものでしょうか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の命をそまつに扱うこと。

イ 生きるために苦しみに堪えること。

ウ 呼吸器の装着を何度も断ること。

エ 生きることでも人に迷惑をかけること。

問六——線4「同じことが言える」とありますが、何が同じなのでしょう。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ともにたいへん立派なことに思えるが、大切にしなければならぬものが何であるかが不透明であるということ。
 イ 教えられた価値を実践することが、それを実践する存在を否定し、その価値自体を裏切ってしまうこと。
 ウ ともにたいへん立派なことではあるが、人から教えられたのではまったく意味がないということ。
 エ 教える側が教えられる側のことを裏切ってしまう、自分たちだけが都合良く存在し続けること。

問七——線5「これは逆立ちしたおかしなことである」とありますが、どうして筆者は「おかしい」と思うのでしょうか。本文中のことばを用いて、三十字以内で説明しなさい。

問八 次のA～Dを読み、問題文の内容に一致する場合は○、一致しない場合は×を、それぞれ解答らんに記しなさい。なお、全て○、または、全て×で解答した場合は、全て不正解とします。

- A 川口氏は生前はASLに苦しむ人々のために努力を重ね、死に際しては迷うことなくみずから潔い死を迎えた人格者である。
 B 耐え難い苦痛から生きるのをやめようというのは仕方がないことで、それは今の医療の限界からして受け入れなければならぬことである。
 C 本当はできるはずのことが行なわれずに、多くの人が生きるのが困難になってしまっていることが、本当の意味で悲惨なことなのである。
 D 日本では、比較的悲惨とは思われない理由で多くの人が自ら命を絶っているが、その死は本人の選択という形で現れるため、問題の要点が見えにくくなってしまっている。

「三」 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

表の水道で手を洗っていると、杉田さんが冷えた麦茶とかりんとうをお盆に載せてやつてきた。わたしたちは仲良く縁側に座って、麦茶を飲んだ。縁側の目の前にあるのが、わたしのアパートの二階だった。

杉田さんは、急に無口になった。わたしもへAへしゃべるのは得意ではないので、黙って麦茶を飲んだ。居心地が悪かったわけではない。むしろその逆だ。杉田さんを今までより、身近に感じる。彼女の体温がくすぐったかったので、わたしはまた麦茶を口にふくんだ。

「こんにちは、おばあちゃん」

門のところでいきなり、声がした。振り向くと、太った年配の女性だった。当然のように門を開け、へBへと庭の中に入ってくる。杉田さんが「ちつ」と言い、立ち上がったので、わたしも腰を上げた。

「まあ、いつもお花がきれいですわねえ。どう、お元気？」

女性はニコニコしながら、わたしたちに近づいてきた。杉田さんとは旧知の仲のような雰囲気だ。

「元気ですよ」

表情を変えず、杉田さんが答える。

「そちらのお嬢さん、お孫さん？」

「いいえ。友達です」

杉田さんの言葉に驚いた。わたしは彼女の友達だったのか。女性が不思議そうな顔を、わたしに向ける。

「あの、隣のアパートに住んでいるんです」

「まあお隣さん。知らなかったわ」

「越してきてまだ、間もないですから」

「おばあちゃん。かわいいお隣さんができてよかったわね」

女性が、子どもをあやすように言う。杉田さんは無視していた。杉田さんがこの女性のことを好いていないのは明白だった。だがそれなら何故、庭に入ってくるのを阻止しなかったのだろう。

「どう、近頃調子は。困ってることとかない？」

「困っているように見えますか？ あたしにはなんの問題もありませんよ」

「そう。娘さん、時々こちらにはいらっしやるの」

「いいえ」

「まあ、冷たいわねえ。電話なんかもかけてこない？」

「あたしも、娘も電話嫌いなんです」

杉田さんは剪定バサミを取り出し、パチパチと植木の手入れを始めた。そろそろ帰ってくれというジェスチャーに違いない。そんなことはお構いなしに太った女性は、しゃべり続けた。この女性のむっとする化粧の臭いが、あたりいっぱいに立ち込めている。

「おばあちゃんも意地張らずに、たまには顔見せにおいで、寂しいからって、娘さんに言っておけばいいのに」

「あたしが寂しいなんて、誰が言ってるのさ」

杉田さんが、植木から目を上げずに答える。女性はちょっと呆れたような顔で、わたしを見た。わたしは彼女に反応しなかった。

「ちゃんと血圧のお薬飲んでますか」

「飲んでますよ。はいはい」

「どこか痛いところとかないわね」

「ありませんね。健康すぎてピンピンしてるわよ」

「お酒とか控えめにね」

「はいはい」

「それじゃあ、あたし帰りますけど。何かあったら迷わず連絡してね」

帰りがけに太った女性は、わたしを見た。

「あなたも、よろしくね」

「はい」

一応返事はしたが、よろしくねといわれても、何をよろしくなのかさっぱりわからない。この人は、自己紹介さえしないのだ。

「誰ですかあの人」

わたしは庭を出て、石段を上っていく女性の丸い背中を見ながら尋ねた。

「ふん」と杉田さんは、ばかにするように鼻を鳴らす。

「福祉ごっこだよ。単なる」

「福祉ごっこ？」

「そう。ボランティアでああいうことやりたがる人、近ごろ多いだろう。自分探したとか、雑誌に煽られてさ。それで行き着いた先が、福祉なんだよ」

「なんか、ちょっと出しゃばってましたね」

わたしが素直な意見を言うと、杉田さんは嬉しそうな顔をした。しかしそれは、わたしにヘンな貼り紙をしたり、わたしのスカートを公衆の面前で捲った時に見せた、盆と暮れと正月がいつべんに来たような笑顔、とまではいかなかった。

「だいたいあたしのことを、おばあちゃん、おばあちゃんって失礼だと思わないかい。あたしにはちゃんと杉田って名前があるんだから」

「杉田さん、名前はなんていうんですか」

「万寿子」

「今度から万寿子さんって呼んでいいですか」

「ああいいよ。あたしもあの人のこと今度から、I って呼んでやろうかね。嫌がるだろうね」

「それ、いい考え。今度からそう呼べば、もうここに来なくなりますよ」

わたしたちは、秘密を共有する少女のように「C」と笑った。

その晩、またあの太った女性が今度はわたしのアパートに現れた。

「悪いけど、ちよっとお話があるの。玄関のドア閉めていいでしょう」

女性は杉田さんの家を見やりながら言った。彼女の厚かましが頭にきたが、仕方なく三和土^注に入れ、ドアを閉めた。

「先ほどはどうも。あたし近藤^{こんどう}についています。この地区の民生委員です」

近藤という女性は、へDに塗ったファンデーションの上から、脂汗^{あせ}をギラギラ光らせていた。なんともいえない、むつとする臭いが、狭いアパート中に充満した。

「竹本^{たけもと}です。三週間前にここに越してきました」

「岬^{みさき}さんの一階がアパートだったなんて、ぜんぜん知らなかったわ」

岬さんというのは、大家さんのことだ。

「ま、それはともかく。ちよっとご挨拶^{あいさつ}したかったの。っていうのはね、杉田さんのことなんだけど。杉田さんってねえ、あたしの言うことぜんぜん聞いてくれないの」

まあ、それはそうだろう。

「家の中にじっと閉じこもって、ご近所付き合いなんかもしないし。地域の老人会の集まりなんかに誘^{あそ}ってるんだけど、まるで興味ないらしくて」

この人はなんでこんなにお節介^{せつけい}なのだ。

「いいのよ。心も体も健康なら。でもあのお年だからねえ。血圧も高いだろうし」

「杉田さん、高血圧なんですか」

「あなたまだ若いから、こういうこと分からないかもしれないけど。七十過ぎたらほとんどのお年寄りが高血圧で、白内障なのよ。それと関節痛。特に女性はみんな膝^{ひざ}が痛いって言うわ」

祖父母はわたしがごく小さいうちに逝^いってしまったので、本当のところ、お年寄りというのがどういう生き物なのか、よく知らない。しかし、これではまるで病気のデパートではないか。

「でも杉田さんって、結構元氣じゃないですか。膝が悪い振りして、わたしの気を引こうとしましたよあの人」

「へえ、そんなことしたの。だけだね。あなた気がつかなかった？」

「何がですか」

「あのおばあちゃん、認知症の症状も出始めてるでしょう」

「認知症って？」

「ボケのことよ。昔は痴呆^{ちほう}症^{しょう}って言ってたけど。ゴミの分別のことで何回注意しても、ぜんぜん直らないし。時々ぼーっとして、遠くを見つめていることがあるでしょう、あの人。そんな時はもう何を言っても、ほとんど上の空」

以前ゴミ置き場で、主婦に万寿子さんはボケていると言われたときには素直に納得したが、今回は頭にきた。多分このオバサンの口から、そんな話が出たからだろう。

⁴ あなたにいったい、何が分かるのよ。

年を取ると、人はだんだん子供に戻ってゆくという。万寿子さんはまさにそれなのだと思う。こういうのは、痴呆とかとは少し違うのではないか。分からないけど。

「そこで悪いんだけどね。あなたに、杉田さんのこと見守ってほしいのよ。できれば、ゴミ出しなんかも手伝ってもらえたらありがたいわ。」

いえ、決してこれは強制ではないのよ。あなたもお仕事とか、お勉強で忙しいでしょうから。まあ同じ地域の一人暮らしのお年寄りの面倒を見るつもりでやっていただけると、助かるんだけど。

あたしの名刺、置いていくわね。何かあったら連絡して。それじゃあ、お邪魔しました」

地域の一人暮らしというのに、勝手に組み込まれているのには抵抗を感じたが、一応領^{うけと}いて近藤さんを見送った。玄関を開け放つと、心地よい風が舞い込んで、お化粧の臭いを一掃した。わたしは大きく深呼吸した。

残念ながら、万寿子さんを見守るつもりはない。見守られていることが分かったら、万寿子さんはきっと反発するだろう。

だが、今日の午後のように、ごく自然に彼女と触れ合うのは、やぶさかではない。わたしは万寿子さんの、数少ない
Ⅱ

(黒野伸一『万寿子さんの庭』)

注 三和土……この場合、玄関のあたりを指す。

問一 問題文を大きく二つに分けると、後半部はどこからですか。最初の五字を問題文中より抜き出して答えなさい。

問二 〈A〉〈D〉にあてはまる言葉を次のア～クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ひらひら	イ するする	ウ クスクス	エ ゲラゲラ
オ ハキハキ	カ べらべら	キ ずかずか	ク こてこて

問三 線1「福祉ごっこ」について、なぜ杉田さんはこのように言ったのでしょうか。その理由として最も適当なものを

次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「福祉」とは社会全体に向けられるべきであるのにも関わらず、近藤さんは杉田さんのことだけを気にかけて終わっているから。

イ 「福祉」とは自発的に行われるものであるべきなのに、近藤さんの行動は周りの雰囲気^{あふ}に煽^{あお}られて実践しているに過ぎないから。

ウ 「福祉」とは本来、精神的に十分成熟した者が行うものであるはずなのに、近藤さんのやっていることは幼稚で子供じみているから。

エ 「福祉」とは相手のために行うべきであるのに、近藤さんの行為は自己満足に過ぎず杉田さんにとっては必要のないものだから。

問四 線2「なんか、ちょっと出しゃばってましたね」とありますが、次の文はその言葉から「わたし」が近藤さんに抱く印象を説明したものです。空らん【a】・【b】に当てはまる言葉を、問題文中より四字以内でそれぞれ抜き出しなさい。

近藤さんとは、いらぬ【a】をやくような【b】い人である。

問五 線3「玄関のドア閉めていいでしょう」とありますが、この時近藤さんはどのようなことを気にしてこう言ったのでしょうか。簡潔に説明しなさい。

問六 ―線4「あなたにいたい、何が分かるのよ」とありますが、「わたし」がそう思う理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近藤さんが杉田さんを認知症であると勝手に決めつけているから。
- イ 近藤さんが今は使われていないような病名を平気で口にするから。
- ウ 近藤さんがあちらこちらで明らかかな嘘を吹聴して回っているから。
- エ 近藤さんが杉田さんのことを見守るよう半強制的に指示するから。

問七 ―線5「ごく自然に彼女と触れ合うのは、やぶさかではない」とありますが、「わたし」が杉田さんと触れ合うことを「やぶさかではない」と感じていることが分かる箇所を、問題文中の語句を用いて五十字以内でまとめなさい。

問八

I

・

II

にあてはまる最も適当な語を、問題文中よりそれぞれ抜き出して答えなさい。

問題はこのページで終了です。